



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2024年度北海道礼文町浜中2遺跡発掘概要報告書
Author(s)	加藤, 博文
Issue Date	2025-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95214
Type	report
File Information	2024Hamanaka.pdf



2024年度 北海道礼文町 浜中2遺跡 発掘概要報告書



Designed by YUKI koji

北海道大学アイヌ・先住民研究センター
Center for Ainu and Indigenous Studies,
Hokkaido University

例 言

1. 本概報は、2024 年 7 月 31 日から 8 月 23 日にかけて日本学術振興会科学研究費補助金 学術変革領域研究 (A)「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究」の計画研究の一つである「北海道の先史人類及び文化の形成」の研究活動の一環として、及び北海道大学 Summer Institute プログラムとして行った北海道礼文郡礼文町に所在する浜中 2 遺跡での考古学発掘調査の概要報告である。

2. 本調査は、北海道大学が組織主体となり、以下の体制で実施した。調査組織は以下のとおりである。

発掘主体者	山崎幸治 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター・センター長)
発掘担当者	加藤博文 (北海道大学アイヌ・先住民研究センター・教授)
調査員	平澤 悠 (東亜大学人間科学部)
調査員	鈴木建治 (国立アイヌ民族博物館・研究主幹)
調査員	久保大輔 (北海道大学大学院 医学研究院・准教授)
調査員	陳 瑪玲 (国立台湾大学人類学系・教授)
調査員	呉 牧鎔 (国立台湾大学人類学系・副教授)
調査員	鄭 玠甫 (国立台湾大学人類学系・助理教授)
調査補助員	GOMES, Amanda (北海道大学大学院文学院博士課程)
	劉 秉玟 (北海道大学大学院文学院博士課程)
調査補助員	JORDAN, Ballard (北海道大学大学院文学院博士課程)
調査補助員	ULANOV, Aleksander (北海道大学大学院文学院博士課程)
調査補助員	ASTIER, Clara (北海道大学大学院文学院博士課程)
調査アドバイザー	木村亮介 (琉球大学大学院医学研究科・教授)
	山崎敦子 (名古屋大学大学院環境科学研究科・講師)
	内山幸子 (東海大学国際文化学部・教授)
	渡辺 剛 (北海道大学大学院理学院・講師)
	中村英人 (北海道大学大学院理学院・助手)
	木山勝彦 (東北学院大学文学部・准教授)
	上奈緒美 (国立歴史民俗博物館・科研費支援研究員)
	白石溪冴 (長崎県埋蔵文化財センター)

遺 跡 名	浜中 2 遺跡 (北海道教育委員会登録番号：H-08-019)
所 在 地	北海道礼文郡礼文町大字船泊村字ホロナイホ 499-2, 499-4, 499-5
発掘面積	40 m ²

3. 2024 年度の調査実施にあたっては、日本学術振興会科学研究費補助金 学術変革領域研究 (A)「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究」の計画研究の一つである「北海道の先史人類及び文化の形成」(JSPS23H04841) 及び「日本列島域における先史人類史の復元的方法の研究」(JSPS23H04836)、さらに科学研究費補助基盤研究 (A)「先住性と集団帰属意識の歴史的形成過程の検討」(JSPS 21H04352)の研究助成を利用した。

4. 本概報の作成は、本研究プロジェクトに参加したメンバーが分担しておこなった。出土遺物のうち、土器片の拓本・断面実測およびトレースは、赤川沙希、大原三奈子（北海道大学アイヌ・先住民研究センター技術補助員）が担当した。石器・骨角器類の実測およびトレースは ULANOV Aleksander と加藤博文が担当した。遺物写真の撮影は主に ASTIER, Clara が担当した。
5. 2024 年度の出土資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターで保管している。
6. 調査の実施に際しては、調査地点地主である末吉愛衣氏に調査期間の全体を通じてご理解とご協力を得た。また調査期間中に工芸家でアイヌ文化アドバイザーである結城幸司氏に遺跡においてカムイノミを執り行っていただいた。「考古学とアート・ワークショップ」においては、チェコ人形アカデミーの人形作家である沢則之氏の指導を受けた。

調査までの準備と調査実施においては、小野徹町長、竹中俊一教育長、藤澤隆史教育委員会次長、高橋鵬成学芸員をはじめ礼文町および礼文町教育委員会にご助力・ご支援をいただいた。また北海道アイヌ協会には調査の実施に際してご助言・ご支援いただいている。調査メンバーを代表して感謝の意を表する。
7. 本年度の出土遺物のうち、イヌの遺体については、東海大学国際文化学部の内山幸子教授を中心に整理作業をおこなっている。またカラフトブタについては、国立歴史民俗学博物館の上奈緒美研究員及び総合大学院博士課程の糸井梨香子氏が分析を進めている。土壌の有機質分析については、北海道大学大学院理学院の中村英人助教を中心に分析を進めている。
8. 2024 年度フィールドスクール参加者
大学院生：
黄浩然（北海道大学大学院文学院修士課程）、ZARINA, Bikmulina（北海道大学大学院環境科学研究院博士課程）、林郁洳（国立清華大学大学院生）、STEVENSON, Miranda（カリフォルニア大学サンタバーバラ校修士課程）、七座友香（サイモン・フレーザー大学大学院博士課程）、WALLACE, Jamie（オックスフォード大学大学院修士課程）、WELSH Mietta（メルボルン大学大学院修士課程）、CRESSINI, Lucas（国立東洋学院大学院修士課程）、JAGODA, Sara（アダム・ミツケヴィッチ大学大学院修士課程）、七座友香（サイモン・フレーザー大学大学院博士課程）糸井梨香子、福原瑤子（総合大学院大学博士課程）、谷康平（名古屋大学大学院博士課程）

学部生：
梁本聖、葉鈺庭、YEW SZE-Hoong、（以上、国立台湾大学人類学系学部生）、ZHOU, Ziming（重慶大学学部生）、柯旻誼（輔仁大学学部生）、万 Runyang、何朝霞（以上、北京師範大学学部生）、李 Zhengrun（廈門大学学部生）、蔣墨青橙、ZHAI Tongxi（以上、国際関係大学学部生）、黄 Shuofei（ダーラム大学学部生）、菊池望月、工藤結維子、峯岸彩心、成田芽衣、武政尚人、土屋明輝、岩崎光太郎（以上、北海道大学学部生）、五戸翔天（東北学院大学学部生）

社会人：
Edward, Lily, Ryan, Shearer, Gath Jseph、神堀結衣、檜山勝彦

目 次

第1章 調査の目的と実施体制	1
第1節 調査の目的	
第2節 浜中2遺跡における考古学調査とプロジェクト研究との関連	
第2章 浜中2遺跡の調査と概要	2
第1節 調査にいたる経緯	
第2節 礼文島の環境	
第3節 遺跡の立地	
第3章 調査区について	5
第1節 調査区の設定	
第2節 調査区の層序	
第4章 検出された遺構	8
第1節 アイヌ文化期の遺構	
第2節 続縄文文化期の墓	
第5章 主な出土遺物	10
第1節 出土遺物の構成	
第2節 土器	
第3節 金属品	
第4節 石器	
第6章 まとめ	16
引用・参考文献	17

第 1 章 調査の目的と実施体制

第 1 節 調査の目的

浜中 2 遺跡での考古学調査は、2011 年から 2016 年までカナダ社会科学・人文科学研究評議会（SSHRC）の研究助成を受けたバイカル・北海道考古学プロジェクト（BHAP：Baikal-Hokkaido Archaeology Project）の一環として、アルバータ大学（カナダ）と北海道大学が共同で企画実施してきた。カナダの研究助成が終了した 2017 年度からは、北海道大学の国際フィールドスクールとして、また日本学術振興会の科学研究費補助金と研究拠点形成事業（先端拠点型）の研究助成を受けて実施してきている。

調査の目的は、船泊湾の砂丘上に位置する遺跡形成過程の解明、すなわち縄文文化期後半から 18 世紀の近世段階の歴史段階のアイヌ文化に至る生活空間としての場の利用の変遷と、過去の気候環境変動と居住集団の経済活動および遺跡環境の変化との対比をおこない、遺跡に居住した人類集団の長期的な環境適応行動と、その中で民族文化の形成過程の復元を目指すことにある。

2024 年度の調査は、4m を超える深さで 累積する文化層の中でも、以下の点に調査目的を合わせて計画を立てた。

- 1) 2016 年度に調査区南西端で I 層中において確認されたアイヌ文化期のアワビ貝集積遺構の広がり の把握、
- 2) III 層から V 層にかけてのオホーツク文化期の遺物集中区及び遺構の確認、
- 3) IX 層中に確認された縄文文化期晩期の土器・石器・動物骨で構成される遺物集中区の面的広がり の確認。

第 2 節 浜中 2 遺跡における考古学調査とプロジェクト研究拠点との関連

礼文島は、先史時代の狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動の復元にとって最良のデータが得られるフィールドである。本プロジェクトでは、礼文島北部の遺跡の立地環境に注目し、船泊湾域に所在する遺跡群において、1) 居住地点における生業活動の時期的変遷の把握、2) 砂丘形成過程と生業活動面（生活面）の形成過程の相関関係の解明、3) 古人骨からの集団系統や古食性データに関するサンプルの収集、4) 遺跡周辺における古気候・古環境データの収集を目指す。

本調査は、2023 年度から採択された文部科学省 科学研究費助成事業 学術変革領域研究「日本列島域における先史人類史の統合生物考古学的研究」の計画研究 B02 班「北海道における先史人類及び文化の形成（2023 年度から 2027 年度）（JSPS23H04841）の一環として実施している他、プロジェクト全体のフィールドスクールとして位置付け、若手研究者が幅広い調査研究手法を学ぶ機会を提供している。

また 2024 年度の調査には、日本学術振興会 科学研究費補助金基盤研究 A「先住性と集団帰属意識の歴史的 形成過程の検討」（JSPS21H04352）の支援を受けた。

第2章 浜中2遺跡の調査概要

第1節 調査にいたる経緯

北海道大学とアルバータ大学による浜中2遺跡における国際共同調査は、2011年から2016年まで実施された。調査にいたる経緯は、これまでの概要報告において説明してきた通りである（加藤・岩波・平澤・鈴木 2012）。

2012年度に調査では、主に地中探査レーダーによる表層からの貝層や墓、配石遺構の分布状態を確認する調査を実施した。2013年度の調査は、7月23日から8月20日までの期間で発掘調査を実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2014）。2014年度の調査は、8月1日から8月31日までの期間で発掘調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2015）。2015年度の調査では、それまでのオホーツク文化期と続縄文文化期に加えて、下層で確認された縄文文化期の遺物包含層の調査を目的として、8月1日から8月31日までの期間で調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2016）。2016年度の調査は、これまでの調査区の南側においてオホーツク文化期の包含層の広がりを確認する調査を、また従来の調査区では引き続き続縄文文化期および縄文文化期の遺物包含層の調査を主たる目的として8月1日から8月21日までの期間で調査を実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2017）。

2017年度からは、北海道大学アイヌ・先住民研究センターが中心となり、引き続き最下層の文化層の確認と、調査区南側での上層の文化層の広がりを確認することを目的として、8月1日から8月25日までの期間で実施した（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2018）。2018年度の調査は、調査区南側の確認された近世段階のアイヌ文化期のアワビ貝集積遺構の調査と、IX層の縄文文化晩期の土器・石器・動物骨の面的広がりを確認を目的として8月4日から8月25日の期間で実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2019）。またこれまでの調査成果については、学会報告など口頭による報告も行なっている（岩波・長沼 2015、加藤 2015、岩波ほか 2016 他）。

2020年度から2022年度にかけては、新型コロナウイルス蔓延の影響を受けて、野外調査の実施を見送っている。2023年度から再開された発掘調査では、遺跡最下層の文化層の確認と、調査区南側における上層の文化層の広がりを確認する調査を実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2024）。

第2節 礼文島の環境

礼文島は、北海道島の北西約60kmに位置する離島である。島は南北に約25.8km、東西に7.9kmと南北に細長い形状を呈している。島の東西の両海岸は、海蝕崖によって急峻な海岸線が続き、島中央部より注ぎ出る河川により開析された谷状地形と河口が入江状の地形を作り出している。島の北部は、一転して緩やかな起伏が続き、金田岬とスコトン岬に挟まれた船泊湾は、遠浅の大きな内湾地形を作り出しており、湾の中央部には複数の時期により形成された砂丘地形が広がっている。島の最高地点は礼文岳で、海拔490mを測る。島全体は、低標高の緩やかな起伏に覆われている。

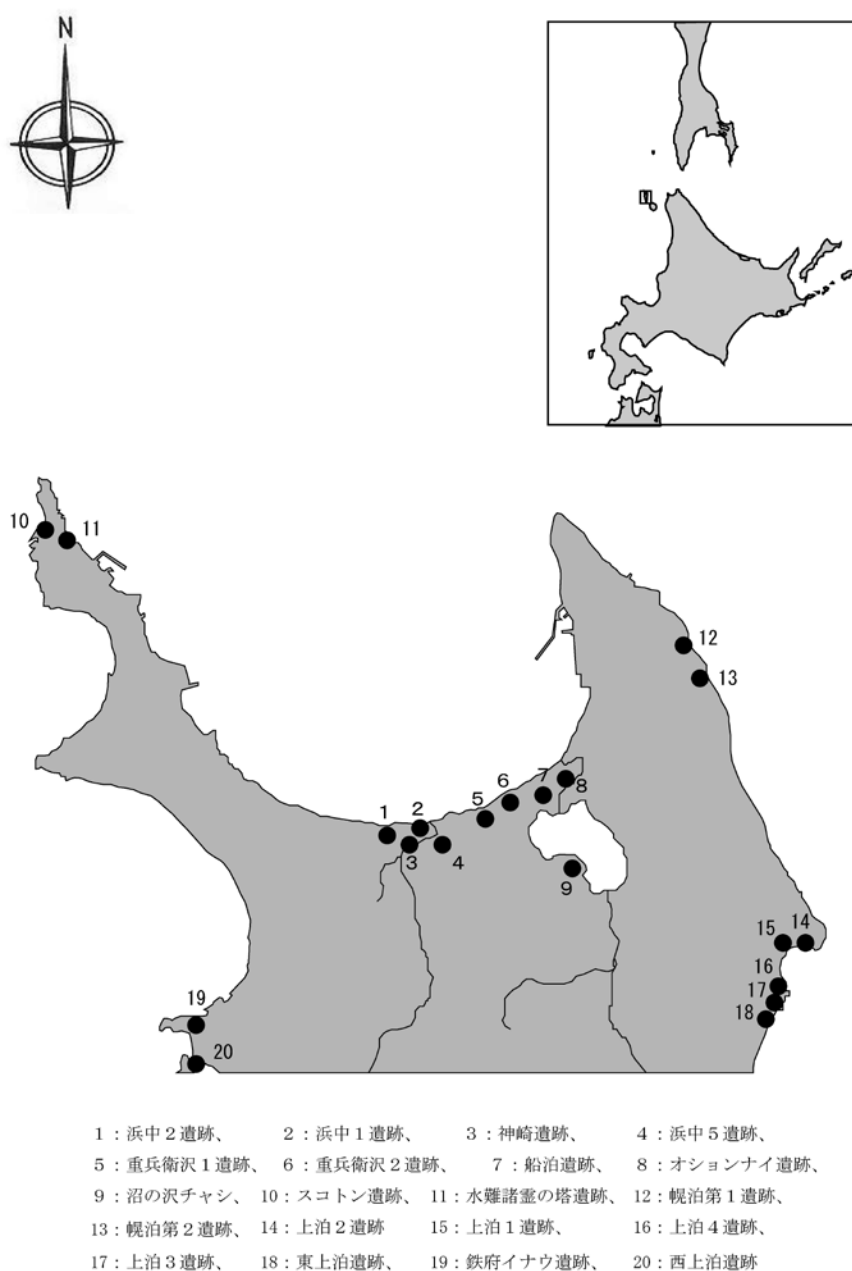
島の動植物は、離島特有の特色を示しており、ヒグマ、エゾシカ、キツネなどの大型中型獣は生息していない。植生としては、針葉樹としてトドマツ、ハイマツ、落葉広葉樹はダケカンバ、オノエヤナギ、草本類ではチシマザサが主体をなしている。

島の北端の船泊湾には、海岸に平行して伸びる砂丘列が発達しており、東側には久種湖が位置する。久種湖は周囲6kmほどの淡水湖である。2011年に本プロジェクト一貫として実施した湖中央部のボーリング調査の結

果によると、湖の形成年代は、船泊湾の砂丘列の発達と連動しており、約 4,000 年前始まり、汽水湖の時期を経て淡水湖となったことが明らかとなっている（Müller et al. 2016）。湖の前面には、船泊砂丘が東西にほぼ 1km にわたり続いている。

船泊湾中央部には、島中央部に源をもつ島最大の河川である大沢川の河口が位置する。この大沢川の河口を界に西側には浜中砂丘が形成されている。現在の船泊砂丘と浜中砂丘の内側には、複数の埋没した砂列帯の存在が確認されており、船泊湾内部の砂丘形成は、いくつかの段階を有し、砂丘形成が変化しながら、現在の地形を形成してきたことが推定できる。

第 3 節 遺跡の立地



第 1 図 礼文島の位置と島北部の遺跡

船泊湾沿いに広がる砂丘上から石器や土器、そして人骨が出土することは、早くから知られてきた。

これまでの調査の成果に基づくと、船泊湾の砂丘列には、縄文文化期からアイヌ文化期にわたる複数の遺物包含層が存在することが明らかとなっている。船泊湾の東側に伸びる船泊砂丘では、縄文文化期後期から、続縄文文化期、オホーツク文化期そしてアイヌ文化期に続く遺物包含層の存在が確認されている（第1図）。

この船泊砂丘の西端で重兵衛沢川が船泊湾に注いでいるが、河口付近の砂丘先端には擦文文化期から近世アイヌ文化期にかけての時期に形成された重兵衛沢遺跡と重兵衛沢2遺跡が知られている（松谷 1986）。

船泊湾の中央部には大沢川の河口が位置するが、河口の西側の砂丘上には、浜中1遺跡と浜中2遺跡が位置する。浜中1遺跡は道道507号線より北側、海側の砂丘に位置し、貝層や墓が露出したことで遺跡の存在が周知された。この遺跡からは長年に渡り、多くの人骨資料が収集されており、遺跡の帰属時期はオホーツク文化期から近世アイヌ文化期と推定されている。

一方、浜中砂丘の南側から後背丘陵の裾野にかけては、神崎ウエンナイ遺跡が位置する。現在の神崎小学校のグラウンドや旧教員宿舎周辺から、続縄文文化期の遺物を含む数多くの土器や石器、動物骨が出土している。

浜中2遺跡は、現在の浜中集落とほぼ重複する範囲と推定できる。現在、砂丘の中央部を道道が東西に貫いて走っており、集落中央の最も高い地点は標高10mを測る。砂丘の東側は緩やかに傾斜しており、砂丘の最高点と裾野の比高差は5mとなっている。浜中2遺跡は、複数の文化層が累積する多層遺跡である。1990年に実施された浜中集落の後背丘陵から船泊湾へ抜ける暗渠敷設に際して行われた事前調査では、続縄文文化期からアイヌ文化期にかけて重層する文化層が確認されている（前田・山浦編 1992）。以後、1990年代には筑波大学や国立歴史民俗博物館による学術調査が実施され、浜中砂丘の全域に様々な時期の貝層や住居跡、墓域などが広がることが明らかにされた（西本編 2000、前田・山浦編 2002）。

さらに2011~2015年度にかけて、千葉大学文学部考古学研究室が、浜中砂丘の最高地点周囲において学術調査を実施している（柳澤編 2016 他）。

第3章 調査区について

第1節 調査区の設定

調査区の設定は2016年度までの調査を踏襲し、中谷榮氏（当時）の所有地南西隅の基準杭から設定した4m四方のグリッド配置に基づいている。グリッド番号は南北方向をアラビア数字、東西方向はアルファベットで表記し、これらの北西交差点をもって呼称している（第2図参照）。

本年度の調査は大グリッドA01、A02、A03、B01、Z01、Z02、Z03を対象に実施し、最終的な面積は計40m²となった。

A02区のうち、A02-c及びA02-dにおいては、VII層の調査を行った。

A02区、Z01区、Z02区では、III層から掘り下げを開始し、IV層上面まで掘り下げを行った。

A01・B01調査区では、2016年度にアワビ貝集積を確認しているが、今年度もアワビ貝層の広がりを把握するために調査区を拡張し、その全容の把握を試みた。

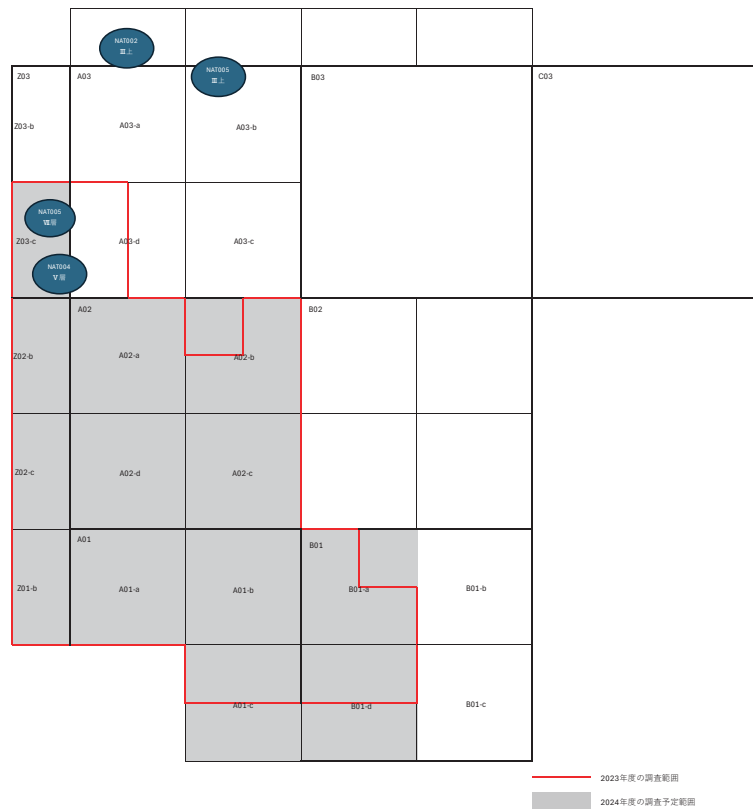
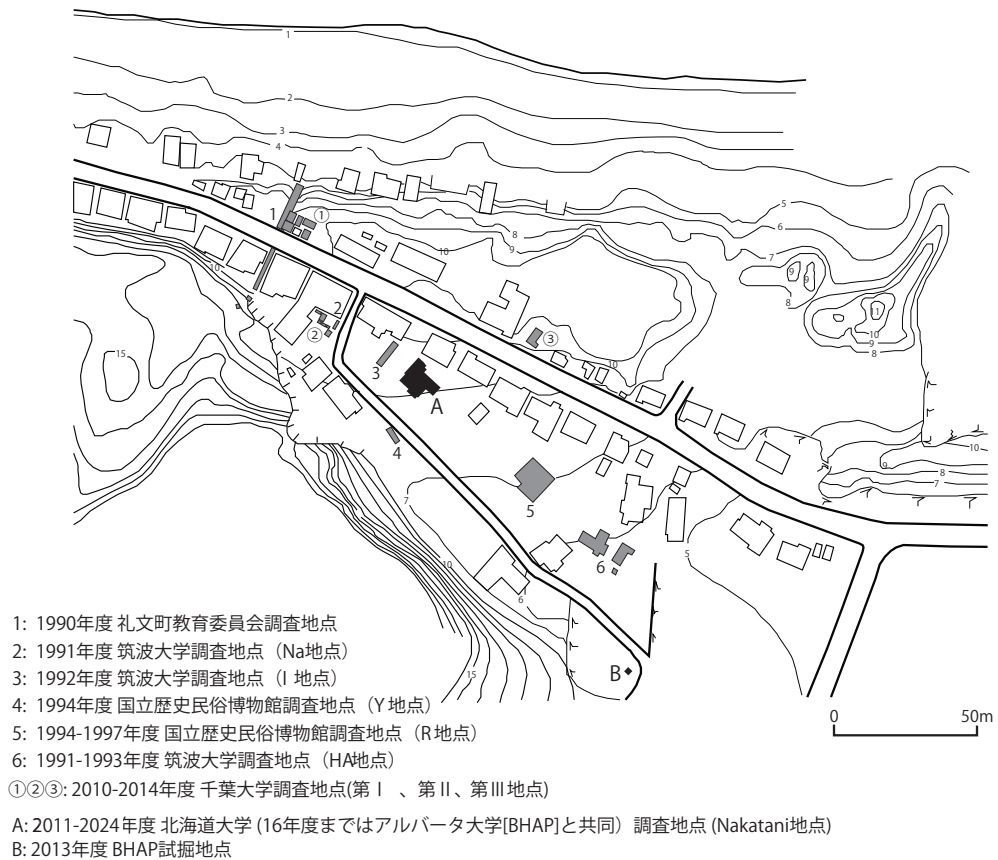
なお、A03区とZ03区の境界付近では、続縄文文化期の埋葬事例を調査した（墓の確認は2023年度）。

第2節 調査区の層序

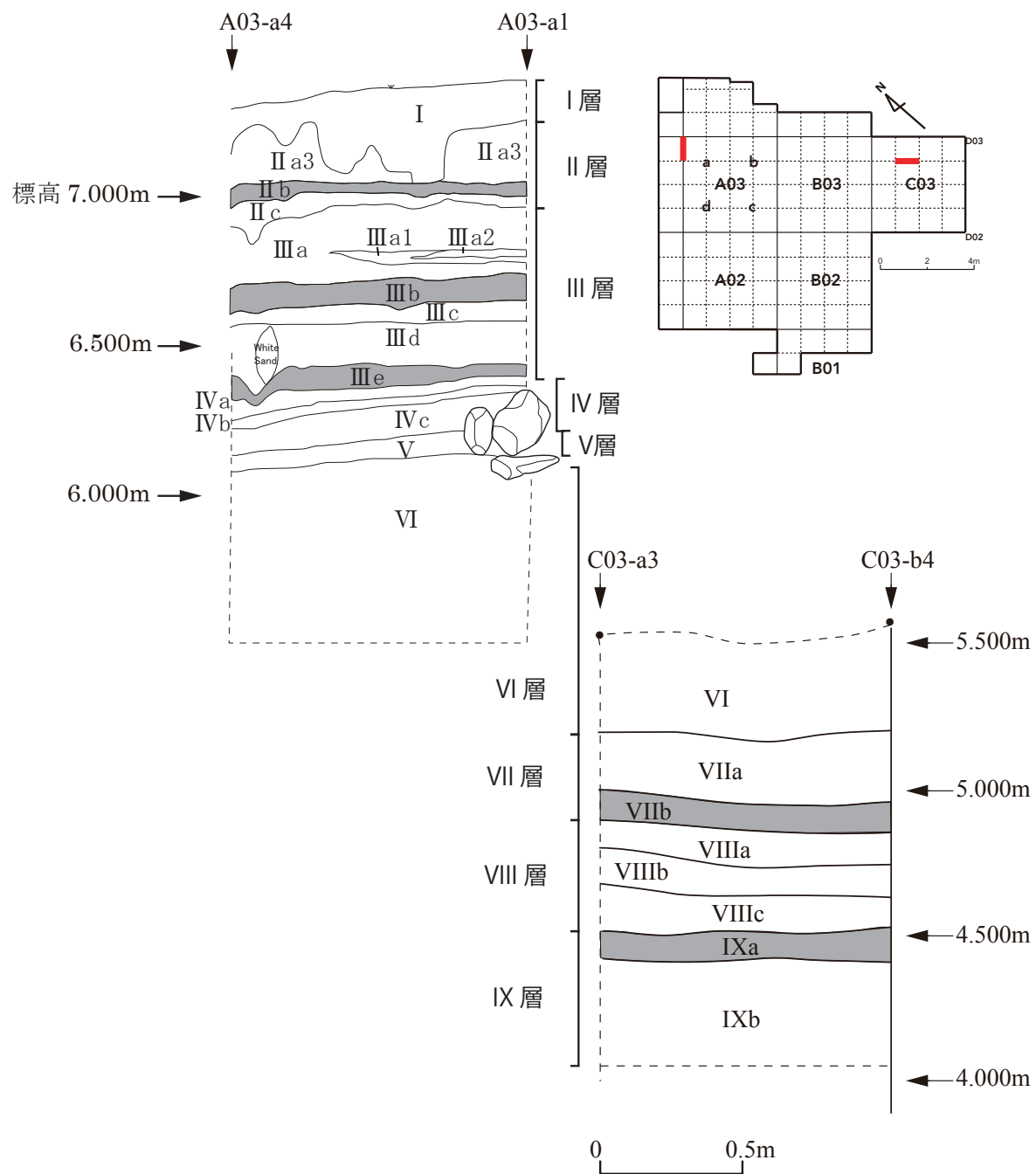
本遺跡の堆積層は、風成の自然砂層と人為的な要因で形成された魚骨層や獣骨層、生活面で構成される。これらは互層となり、全体で4mに及ぶ厚い文化層を形成している。魚骨層は、ラミナ状に広がり、発掘範囲の全域に均一な広がりを見せていない。部分的に重なりながら、局所的に厚く堆積する範囲も見られ、分層を困難にしている。調査区全体の基本土層は、上層から以下のような様相を呈している。

- I 層：表土層および攪乱層。下層は一部、近世末期の文化層を含む
- II 層：砂層。近世アイヌ文化期の局所的なアワビ貝層、擦文文化期、元地式段階の遺物を含む
- III 層：魚骨層および貝層。オホーツク文化期（元地式、沈線文式、刻文式段階）の遺物を含む
- IV 層：砂層。オホーツク文化期（十和田式段階）の包含層
- V 層：砂層。オホーツク文化期（十和田式段階）～続縄文文化期の文化層
- VI 層：砂層。続縄文文化期の文化層
- VII 層：砂層。続縄文文化期の文化層でVI層よりも遺物や遺構が増える
- VIII 層：砂層。続縄文文化期および縄文文化晩期の文化層で獣骨の密集面を含む
- IX 層：砂層。縄文文化晩期中心の文化層で獣骨の密集面を含む

I層からV層までは、文化層の形成過程にさらに細かく分層することが可能である。部分的にラミナ状に堆積している魚骨層やウニ殻層を含んでいる。調査においては、投棄単位で把握できるものも見られる。分層可能な範囲については、出土遺物の取上げ作業でも分層した単位で記録を行っている。



第2図 遺跡周辺地形と調査区配置図



第3図 遺跡の基本層序

第4章 検出された遺構

第1節 アイヌ文化期の遺構

アワビ貝集積遺構

2016 年度に I 層中で確認されたアワビ貝の集積遺構は、これまでの調査の過程において出土した遺物から、江戸期から明治初頭にかけてのアイヌ文化期の遺構であることが明らかになっている。

2024 年度の調査では、アワビ貝層の西側と南側への広がりを確認する目的で、2023 年度に引き続き、B01-a 区と B01-d 区を中心にアワビ貝層の広がりを確認しつつ、貝層の掘り下げを行った。

アワビ貝層の層厚は、全体として 10cm 程をはかり、アワビ貝の表面には、方形や円形のヤスによる刺突痕が認められる。またアワビ貝層中には、オットセイなどの海獣骨が含まれており、その多くに金属器によるカットマークを確認することができる。これまでアワビ貝層からは、マキリや古銭、鉄釘が出土しており、2023 年度には、鯨骨製の先端を剣先状の研磨し、柄部に二段の切り込みを入れた骨角器が出土している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編 2024、第 6 図参照）。同様の骨角器は、1990 年の浜中 2 遺跡の調査（前田・山浦編 1992）や、同じく船泊湾に位置する重兵衛沢 2 遺跡（松谷編 1986）においても、近世アイヌ文化期に形成されたアワビ貝層から出土している。重兵衛沢 2 遺跡の調査では、調査者らは「基部挟入骨器」と呼称している。形状から見て、アワビ貝の採集に用いる道具として考えることもできるが、先端部に摩耗痕はなく、その形状の特異さから、別の機能も推定可能であると思われる。管見の限りでは、アイヌ文化期の儀礼に用いる祭具にも類例が見られないことから、現時点ではその用途は不明である。

2024 年度の調査では、海獣の肋骨を素材としたへら状の骨角器が出土している（第 7 図 9）。これについてはその形状から見て、アワビおこしの機能が推定できる。

これまでの調査において、アワビ貝の集積は、2023 年に確認された小礫の集中、骨角器や部分的に人為的に変形された金属器、解体痕を残す海獣骨、古銭などを含んでおり、これら一連の行為が連続したものであることから見て、アワビ貝の採取や加工に関連したある種の儀礼行為と関係したものである可能性が高い。2025 年度の調査においても、このアワビ貝集積遺構の調査を進める予定である。

第2節 続縄文文化期の墓

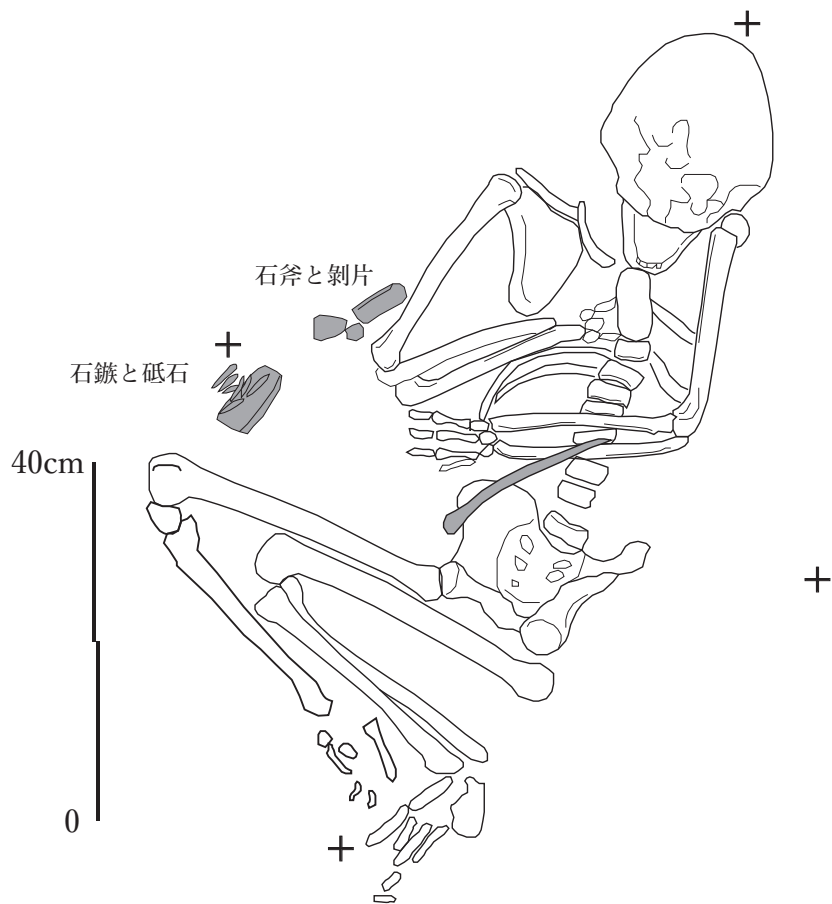
2023 年度の調査において、A03 区と Z03 区の境界域の VII 層中において、埋葬人骨を確認した。調査区境界に接しており、上半身が未調査の区域に続くことから、2023 年度の時点では、一旦、埋め戻していた。

2024 年度の調査では、この埋葬事例を NAT006 と呼称し、改めて、周辺の掘り下げを行い、墓壇の範囲や副葬品の有無についても確認を行った。埋葬された遺体の周囲の砂層は色調も締まりも一様で、明確な墓壇の境界を確認することはできなかった。

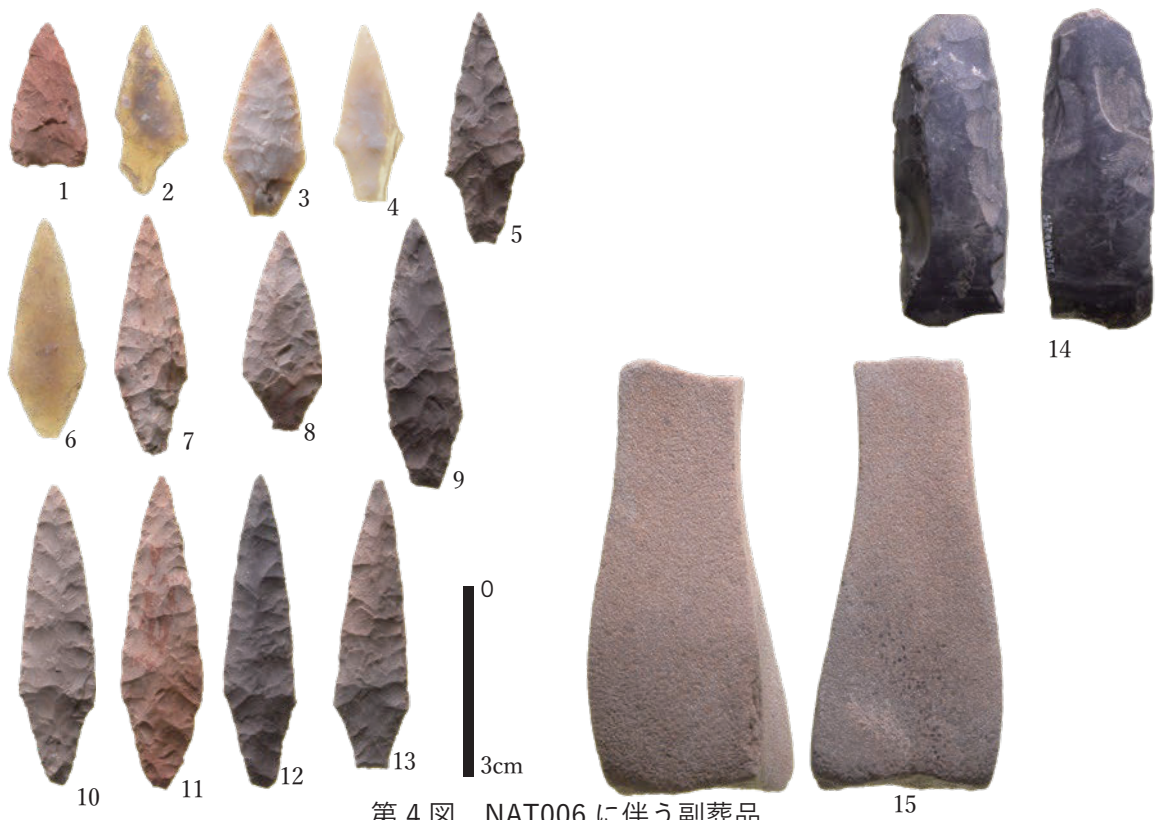
埋葬姿勢は、仰臥屈葬で、両腕は胸の部分で交差する状態に置かれ、下肢は右側に大きく倒れ込んだ状態になっている。埋葬後の土圧の関係からか、頭部は頭頂部から上顎が左手側に大きくズレており、下顎と離れた状態にある。

遺体の右腕傍に緑色岩製の磨製石斧が 1 点、頁岩製剥片が 2 点、また砂岩製の砥石が 1 点、さらに砥石の上に安置する状態で、14 点の石鏃が副葬されている。石鏃の素材の内訳は、頁岩製が 6 点、赤色凝灰岩製が 4 点、瑪瑙製が 4 点である。

副葬品として土器は含まれておらず、この墓の帰属時期は、出土層位である VII 層以外の決めてはない。



第3図 NAT006 の出土状況



第4図 NAT006 に伴う副葬品

第5章 主な出土遺物

第1節 出土遺物の構成

2024年度の発掘調査においては、I層からVII層まで、各層から遺物が出土している。

層ごとの出土総数や詳細な内訳は現在確認中である。現場でトータルステーションを用いて3Dデータを記録して取り上げた出土資料は、土器片251点、石器291点、骨角器及びその未製品41点、動物遺存体387点、金属製品7点、ガラス玉1点であった。記録点数は計982点であった。

第2節 土器（第5図・第6図）

第5図1から10に示したものはIIa層からIII層にかけて出土した土器片である。

1は、擦文土器の頸部破片である。2は、オホーツク文化期の刻文式土器の頸部破片であり、ボタン状の突起が装飾されている。3はオホーツク文化期の沈線文式土器の口縁部破片である。4と9はオホーツク文化期の刻文式土器の口縁部破片である。5は、オホーツク文化期の沈線文式土器の口縁部破片。6はオホーツク文化期の摩擦式浮文土器の口縁部破片である。7はオホーツク文化期の刻文式土器と思われる口縁部破片であるが、口唇部に二本の横走る沈線が見られ、その直下に刻みが施されている。口唇の内側には段差が見られる点特徴的である。8はオホーツク文化期の沈線文土器の口縁部破片。口縁直下に刻みと沈線の組み合わせが見られる。10は、オホーツク文化の沈線文土器の口縁部破片。口唇部は大きく波打っており指を押し付けることで刺突を施している。口縁部下には、浅い沈線が並行して横走している。

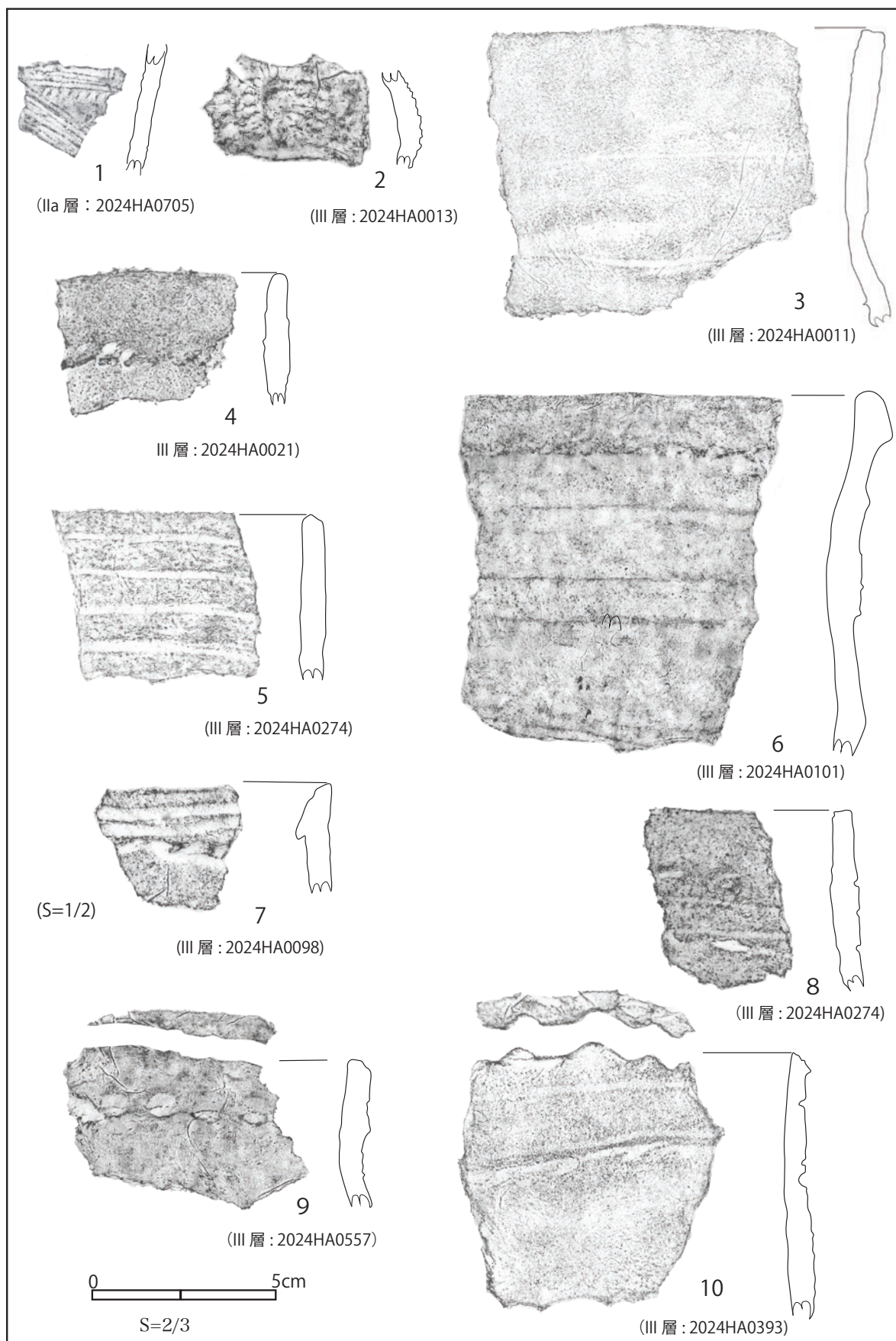
第6図1から8に示したものは、V層からVII層にかけて出土した土器片である。

1から3はオホーツク文化初期の十和田式土器である。いずれも口縁直下に外から内側へ（OI）の刺突が施されている。1と2の口縁はやや外反するが、3の口縁はほぼ垂直にたった状態である。

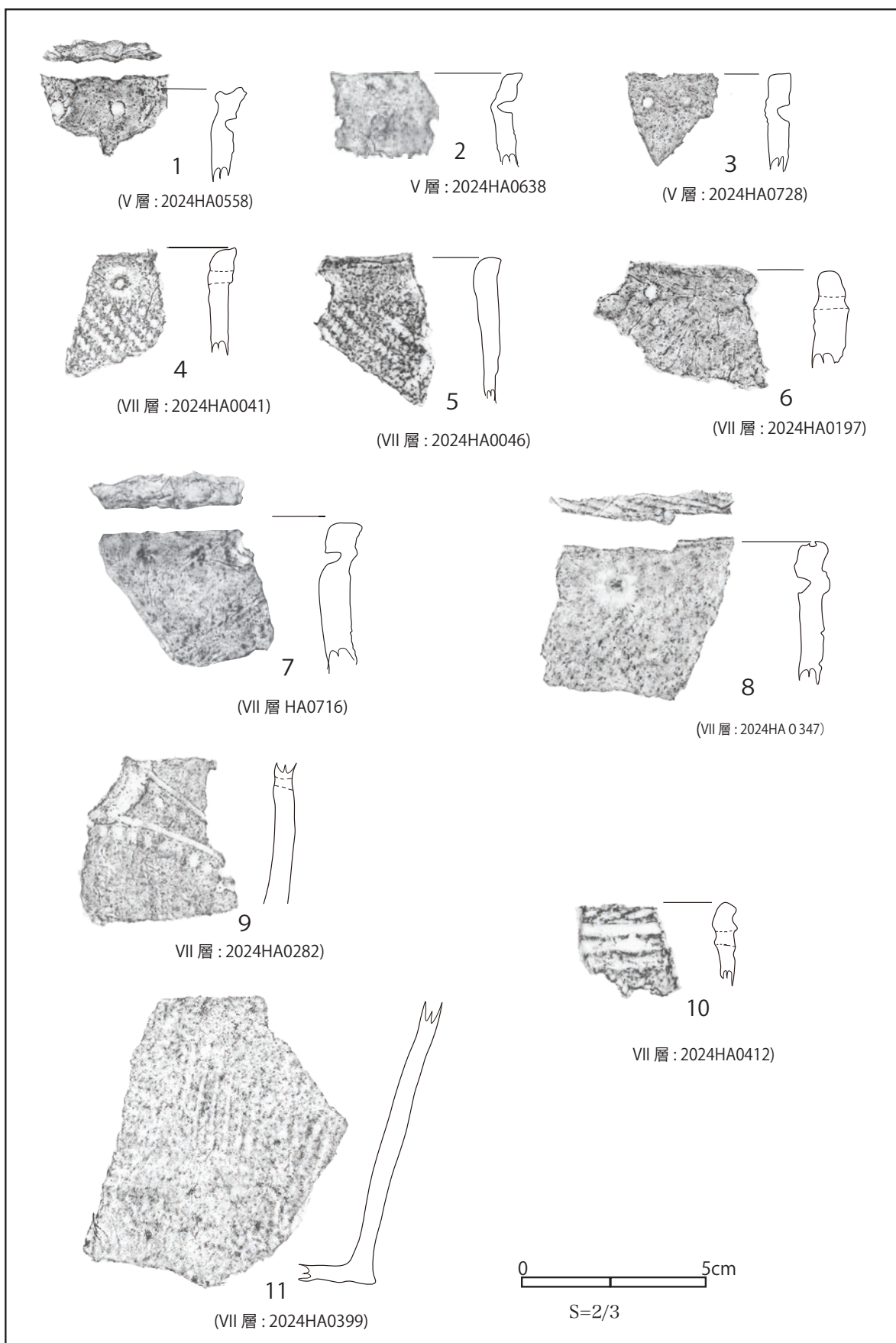
4から11はV層から出土した続縄文文化期の土器片である。4から8は口縁部破片であり、内側から外側（IO）への円形の刺突が施されている。7と8の口唇部は平坦に作り出されており、8の口唇部には縄線が見られる。11は、底部から胴部にかけての破片。この他に破片が接合する状況から3個体の底部が確認できる。VII層からの土器は、いずれも細かな破片の状態で出土しており、完形に復元可能な土器個体は確認できていない。

第3節 骨角器（第7図）

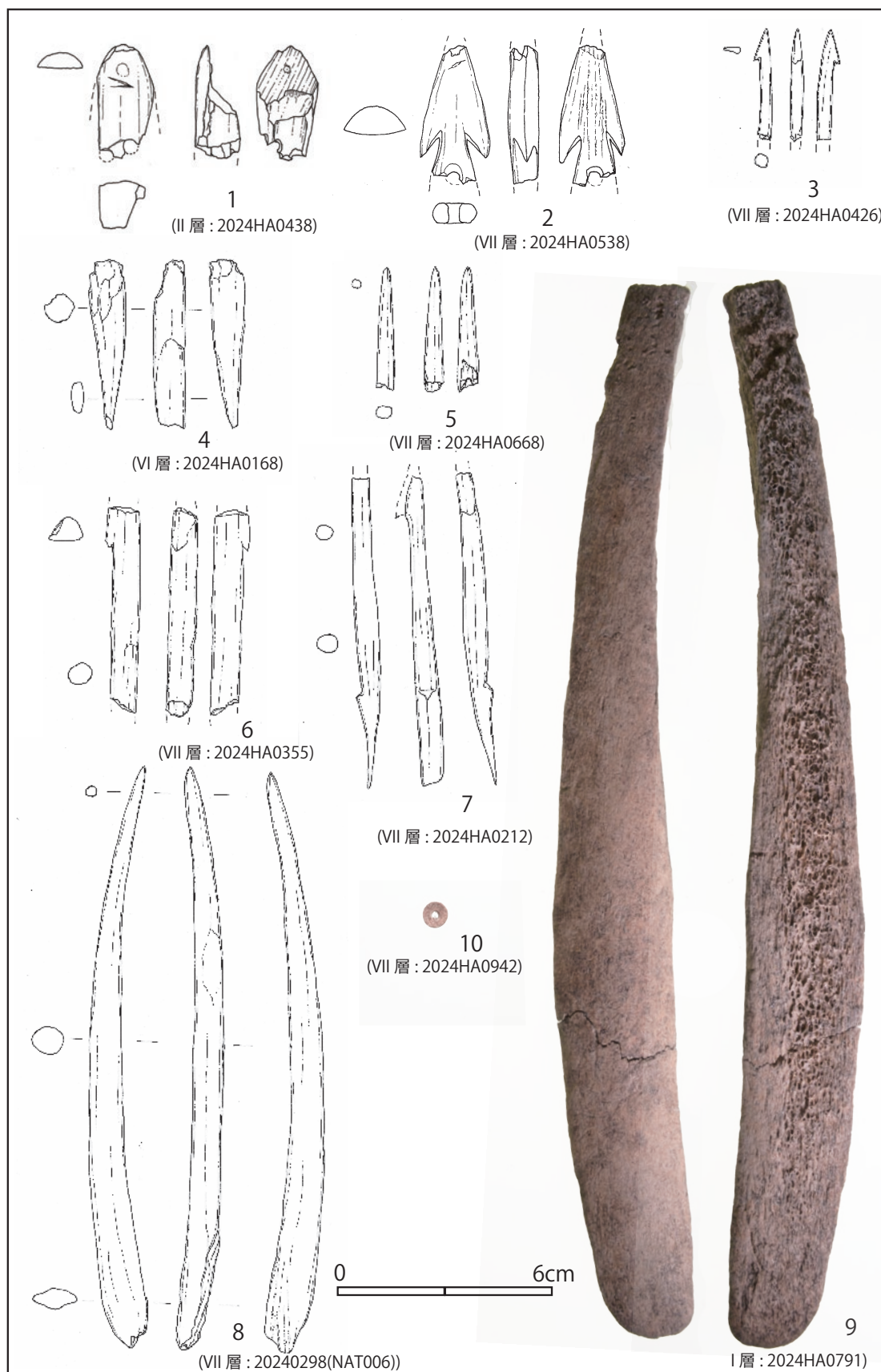
1はI層のアワビ貝層から出土した骨製のキテ（鉞頭）の先端部である。先端の切り込み部には鉄製の鉞先鏃を固定する目釘穴が残されており、スリット側には鉄鏃が付着している。2は、VII層から出土した骨製の鉞先の先端部。先端の左右に返しが見られ、下端の折損部にはラインホールが残されている。3は、VII層から出土した骨製のヤスの先端部。4は、骨製ヤスの基部。先端部と中部は欠損している。5は、VII層から出土した骨製ヤスの先端部。6は、VII層から出土した骨製ヤスの中央部。先端と基部は欠損している。8はVII層で確認された埋葬事例NAT006に副葬されていた骨製の刺突具。9は、I層のアワビ貝層の下部から出土した鯨骨製と思われる骨製のアワビおこし。10はVII層より出土した貝製平玉である。



第5図 出土土器



第 6 図 出土土器



第7図 出土骨角器

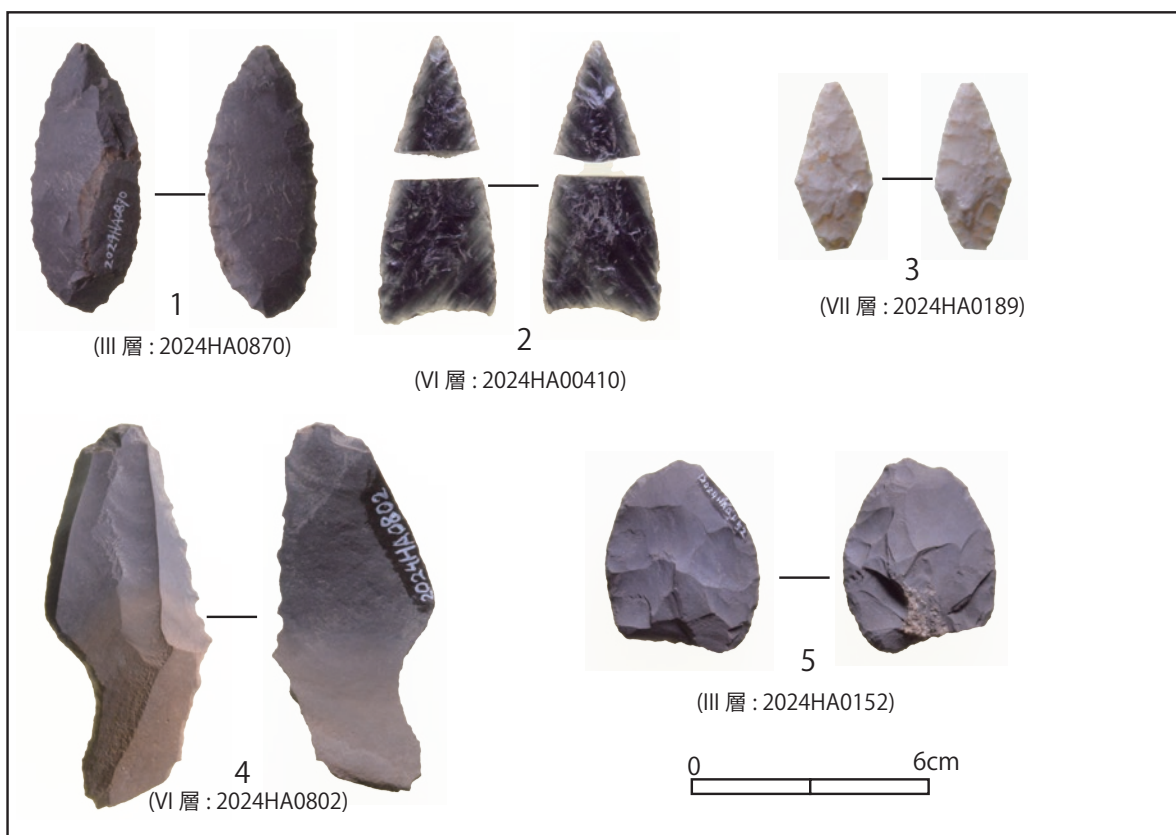
第4節 金属器（第8図）・石器（第9図）

第8図の1は、I層のアワビ貝層中から出土した明治14年の銘がある半銭銅貨である。2はIII層中から出土したガラス玉である、オホーツク文化期のガラス玉としては、我々の調査区から出土した唯一のガラス玉である。特に遺構とは関係せずに包含層中より出土している。3はI層のアワビ貝層中より出土した銅製の円盤型の飾り金具である。この種の銅製の円形の飾り金具は、アイヌ民具資料ではイカヨビコロと呼ばれる飾り矢筒の表面を飾る金属板として知られている。

第9図の1はIII層より出土したオホーツク文化期の頁岩性の尖頭器である。背面には一部礫面を残し、覆面には素材である剝片の主剥離面を残している。周縁加工により形状を作り出している。2はVI層より出土した続縄文文化期の黒曜石製の両面加工の石鏃である。サイズと形状からして銚先鏃の可能性が高い。3はVI層より出土した続縄文文化期の瑪瑙製の石鏃である。4は、VI層より出土した続縄文文化期の頁岩製の抉入型の削器である。縦型剝片を素材とし、下部の一方の側縁部に大きく内湾する刃部を作り出している。5はIII層より出土したオホーツク文化期の頁岩製の円形削器である。



第 8 図 出土金属器



第 9 図 出土石器

第6章 まとめ

2024年度の調査は、I層の近世江戸期に比定されるアイヌ文化のアワビ貝の集積遺構の広がり、III層からV層にかけてのオホーツク文化期の包含層の調査、さらにVI層からVII層で確認されている縄文文化期の生活面の調査を行った。

アワビ貝の集積遺構は、近世江戸期に形成されたものを主体とするが、上層からは明治期の貨幣が出土するなど、連続して一定の期間に継続して形成されたものであることが明らかになった。平面的な広がり、さらに南側と西側へ伸びる可能性がある。また2023年度に確認された小礫の集中を踏まえると、アワビ貝の形成過程には、一定の規則性（法則性）を持つ可能性も想定される。アワビ貝層から出土する資料は、調査年度を重ねるごとに多様性を示しており、アイヌ文化期の様々な用具がアワビ貝とともに埋納されている状況が見て取れる。

オホーツク文化期の包含層については、2023年度と2024年度の調査範囲では、ほぼ魚骨層は確認されていない。黒色砂の包含層は細かく細分することはできず、III層中より摩擦式浮文式土器、沈線文式土器、刻文式土器の時期の異なる複数の土器片が混在して出土している。明確な遺構は確認できていない。一方で2024年度の調査ではガラス玉が出土しており、周辺を含めて今後のIII層中の遺構の所在についても調査を進める予定である。

V層はオホーツク文化期初頭の十和田式土器段階の遺物が出土する包含層である。V層中ではこれまでも集石土坑が確認されており、III層中のオホーツク文化期の生活面とは異なる活動が行われていた可能性が高い。またIII層に比べて石器類の出土量が多いこともV層の特徴である。

VI層からVII層は縄文文化期の生活面が確認されている。2024年度の調査でも海獣骨や土器、石器が密集する生活面の広がり確認されている。調査面積が少なく、その全容はいまだに不明である。炉など遺構も確認できていない。出土する遺物の内容は多彩であり、2024年度の調査では石器や土器に加えて貝製平玉も出土している。土器については、細片が多く器形を復元できるまとまった個体を確認できていない。復元できた底部破片から推定して、少なく見積もって3個体分の土器があると推定される。細かな破片の接合作業を継続中であり、土器型式の特定も含めて、分析を続ける予定である。

2024年度の調査では、遺跡最下部の文化層である縄文晩期の文化層の調査はできなかった。この文化層の調査については、2025年度以降の調査でその広がり、内容の把握を行いたい。

引用・参考文献

- 岩波連、長沼正樹 2015「浜中 2 遺跡の遺跡形成過程とその特異性」『一般社団法人日本考古学協会第 81 回総会 研究発表要旨』、日本考古学協会、東京、154-155 頁
- 岩波連、平澤悠、岡田真弓、種石悠、長沼正樹、藤澤隆史、薦谷匠、佐藤丈寛、深瀬均、木村亮介、米田穰、安達登、佐藤孝雄、石田肇、加藤博文 2016「礼文町浜中 2 遺跡における考古学調査 (2011-2016 年度)」北海道考古学会 (編)『2016 年度北海道考古学会遺跡調査報告会資料集』、北海道考古学会、登別、83-92 頁
- 加藤博文 2015「礼文島における海洋適応史の復元 - 国際共同研究を通じた取り組み -」岸上伸啓 (編)『国立民族学博物館調査報告 132 環北太平洋地域の先住民文化』、国立民族学博物館、大阪、125-143 頁
- 加藤博文、岩波連、平澤悠、鈴木建治 2012『2011 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡考古学調査概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、<http://hdl.handle.net/2115/52658>
- 西本豊弘編 2000『浜中 2 遺跡発掘調査報告書』国立歴史民俗博物館研究報告 85 集
- 東通村史編集委員会編 1999『東通村史 遺跡発掘調査報告書編』東通村
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2014『2013 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、<http://hdl.handle.net/2115/56663>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2015『2014 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、<http://hdl.handle.net/2115/58760>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2016『2015 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2017『2016 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/65258>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2018『2017 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2019『2018 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/76489>
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2024『2023 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌 <http://hdl.handle.net/2115/92152>
- 前田潮・山浦清編 1992『北海道礼文町 浜中 2 遺跡の発掘調査』北海道礼文町教育委員会
- 前田潮・山浦清編 2002「礼文島浜中 2 遺跡第 2 ～ 4 次発掘調査報告」『筑波大学先史学・考古学研究』13、35-87 頁
- 松谷純一編 1986『重兵衛沢 2 遺跡』北海道礼文町教育委員会
- 三宅俊彦 2020「海外で出土した寛永通宝」『月刊 考古学ジャーナル 4』No. 738, 9 - 13 頁
- 柳澤清一編 2016『北海道礼文町浜中 2 遺跡 第 5 次発掘調査概報』、礼文・利尻島移籍調査の会
- Müller S., Schmidt M., Kossler A., Leipe C., Irino T., Yamamoto M., Yonenobu H., Gosler T., Kato H., Wagner M., Waber A., and Tarasov P. 2016, Paleobotanical records from Rebun Island and their potential for improving the chronological control and understanding human-environment interactions in the Hokkaido Region, Japan. *The Holocene*, 1-15, pp. 1646-1660, <https://doi.org/10.1177/0959683616641738>

報 告 書 妙 録

ふりがな	にせんにじゅうよねんどほっかいどうれぶんちょうはまなかにいせきはつつがいうほうこくしょ						
書 名	2024 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書						
副書名	Preliminary Archaeological Field Report of Excavation at Hamanaka 2 site, Rebun town, Hokkaido, JAPAN						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 加藤博文研究室						
編集機関	北海道大学アイヌ・先住民研究センター						
所在地	北海道札幌市北区北 8 条西 6 丁目						
発行年月日	2025（令和 7）年 3 月 日作成						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号				
はまなかにい せき 浜中 2 遺跡	ほっかいどうれぶんぐんれぶんち ょうおおあざふなどまりむらあざ ほろないほ 北海道礼文郡礼文町大字船泊村字 ホロナイホ	1517	H-08-19	45° 43’ 36”	141 ° 00’ 96”	20240731～ 20240824	40 m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
浜中 2 遺跡	遺物 包含地	アイヌ文化期 (近世) オホーツク文化期 続縄文文化期	アワビ貝送り遺構 動物骨集中 墓 1 基（2023 年度に 確認されたもの）	古銭 骨角器 土器、石器 動 物 遺 存 体 （海獣類、鳥 類他） 土器、石器		アワビ貝の集積は江戸期か ら明治期初頭にかけて長期 に形成されている。 墓には複数の石鏃が副葬さ れている。	
要約	調査区南部 B01 区において I 層中で確認された近世アイヌ文化期の送り場遺構の調査を継続した。貝層からは明治 14 年の半銭銅貨が出土し、江戸期から明治期初頭にわたる長期の時期に営まれた遺構であることが確認できた。オホーツク文化期の包含層において遺構は確認されていないがガラス玉が出土している。続縄文文化期の生活面は、さらに南側に広がる様相を示している。調査区西側で続縄文文化期の墓を確認し、調査している。成人男性の埋葬である可能性が高い。副葬品には石斧、砥石、14 点の石鏃が副葬されている。						

2024 年度

北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書

2025 年 3 月 20 日 作成

編集 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 加藤博文研究室

060-0808 札幌市北区北 8 条西 6 丁目

